

1.研究目的 近年、都市公園などの公共空間は「つくる時代」から「活かす時代」へと移行してきている。本研究では、「市民とともに育て続ける公園」をコンセプトに時代やニーズに合わせて変化させる公園づくりに取り組む安満遺跡公園を対象地とし、その空間構造と人々の滞留行動との関係性を分析し、公園の設えのあり方を示すことを目的とした。

2.研究方法 本研究では、安満遺跡公園の空間構造と、人々の滞留行動の調査に基づく分析を行った。空間構造は、現地調査による物的環境と自然環境に関する構成要素の把握により捉えた。滞留行動は、令和4年9月20日に、調査員8名、令和4年10月1日に、調査員6名で10時～17時30分まで調査した。滞留属性を1人、グループ、親子、子どもの4種類、滞留行動を飲食、会話、スマホ、休憩、静的遊び、動的遊びの6種類に区分し、現地で1時間ごとに滞留場所を地図上にプロットし、滞留数を計測した。分析では、エリアごとの空間構造と属性・滞留行動との関係性を平日と休日の2日間を通して比較した。エリアは、A：サンスター広場前エリア、B：環濠外エリア、C：環濠内エリア、D：SAKURA広場前エリア、E：遠距離エリアの5エリアに区分した（図1、図2）。

3.解析結果及び考察 【空間構造】安満遺跡公園は、東西に飲食店や屋根付き広場、遊び場が設けられ、多様な滞留行動を促す物的環境構成要素を備えている。また、周囲を囲む樹林帯、各エリアに高木や低木が混在する植栽空間、公園全体に広がる芝生広場などの自然環境構成要素を備えている。Aエリアは、屋根付き広場や芝生広場が設けられている。Bエリアは、外周が樹林帯で囲まれ、内部には芝生広場が広がっている。Cエリアは、環濠や高木樹林、施設が設けられている。Dエリアは、屋根付き広場、飲食店、遊び場、高木樹林が設けられている。Eエリアは、高木樹林が配植され、広大な芝生広場が設けられている。【滞留行動】

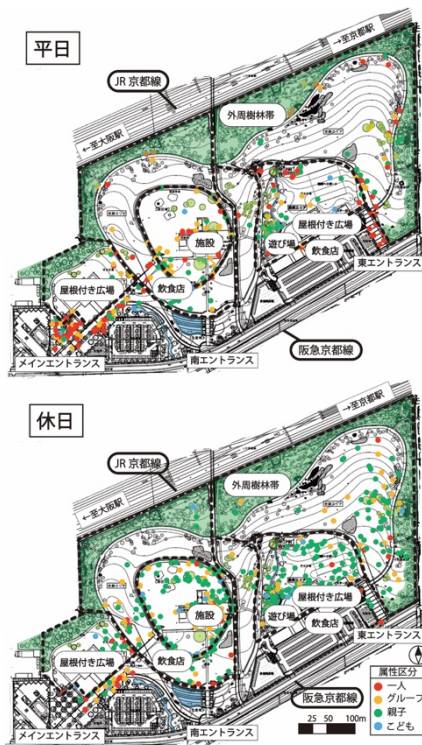


図1 安満遺跡公園の属性別にみた滞留行動の推移

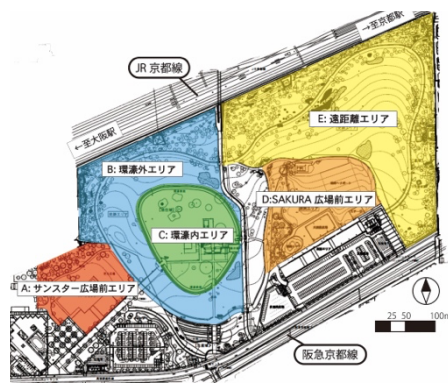


図2 安満遺跡公園におけるエリア区分について

A エリアでは、屋根付き広場に滞留が集中し、平日、休日ともに他のゾーンと比べて滞留が少ないことが示された。B エリアでは、平日、休日ともに休憩利用が2~3割、静的遊び利用が2割程度を示し、静的な行動と動的な行動が混在している。一方、隣接するC エリアと比べて滞留者数が少なかった。C エリアでは、平日、休日ともに休憩利用が2~3割程度を示し、休日は平日と比べて飲食利用、会話利用が2割程度増加していた。また、これらの滞留行動は、環濠や施設周辺で発生する以外に高木樹林が植栽されている空間で生じていることから、物的環境構成要素や自然環境構成要素が滞留に影響を与える要素となることが推察できる。特に、休日はC エリア全体に人々が密集する傾向にあることから、周辺エリアに滞留を分散させる空間の設えの工夫が必要であると考えられる。D エリアは平日、休日ともに静的遊び利用が3割、休憩利用が3割、動的遊び利用が1~2割程度滞留していたことから、多様な滞留行動を創出する空間であることが分かった。さらに、休憩利用は高木樹林や園路沿いで滞留し、動的遊び利用は芝生広場で行われる傾向にあることから、滞留行動の違いによって空間の利活用の選定に影響をもたらす可能性を示すことができた。休日はさらに高木樹林付近に人々が密集する傾向が示されたことから、植栽空間を拡張することで滞留の分散を促す空間の設えなどが有用であると考えられる。E エリアでは、平日、休日ともに休憩利用が2~3割、飲食利用、会話利用が1~2割程度を示し、休日は平日と比べて静的遊び利用が2割、動的遊び利用が1割増加することが分かった。このことから、E エリアは、静的な行動と動的な行動が混在する傾向が伺えた。一方、休日には静的な行動の多い高木樹林付近に人々が密集し、動的な行動の多い芝生広場では北側と南側に滞留が集中していることから、E エリア全体を有効に活用する必要があると考えられる。また、全てのエリアを通して、高木樹林には常に滞留が発生していることから、高木樹林は滞留行動を誘引する重要な要素と言える。

4.まとめ 以上の知見を踏まえ、空間の設えのあり方を考察し、改善案を複数提案した(図3)。図3の①はB エリアとC エリアの間に位置し、現状では環濠の外側は利用されず、環濠内に滞留が集中している箇所である。そのため、環濠外にも高木植栽を配植しテーブルを配置するなどによって、滞留空間を拡張することができる考えた。また、緑の連続性や重層性を創出するためには、既存の樹木の樹種を踏まえながら、背景の山並み景観に配慮し樹高を管理することが重要となる。図3の②はE エリアに位置し、現状では、高木樹林に人々が集まり、芝生広場は利用されていない箇所である。そのため、賑わいの領域性を創出するための手段の一つとして、既存の高木樹林に着眼し、圍繞空間の創出につながる配植や空間の設えも有効な手段となる。

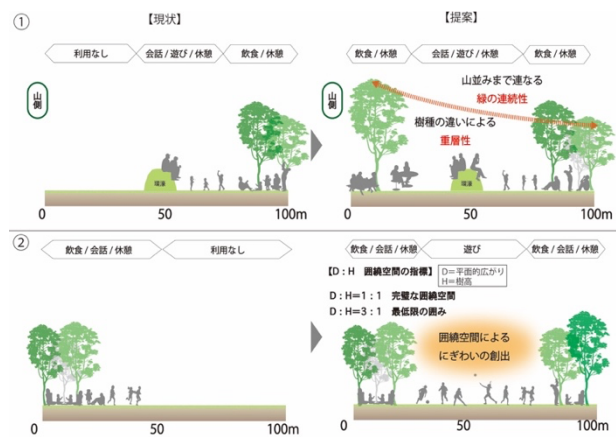


図3 安満遺跡公園の設えについての提案